

今年一〇月に社名を「メタ」に変更したフェイスブックが新規の構想として発表した「メタバース」が話題になっている。メタは超越を意味する接辞、バースはユニバースの一部で、両者を合成した超越した宇宙（空間）という意味であり、翻訳すれば仮想世界とか仮想空間になるが、意図は地理空間を代替する情報空間を提供するということである。

これは新規の構想ではなく、言葉としてはアメリカの作家N・ステイブンソンの小説『スノウ・クラッシュ』（一九九二）に登場しているし、ネットワークで接続された多数の人々が情報交換する仮想社会はインターネットの普及とともに登場した「セカンドライフ」（二〇〇三）をはじめ数多く出現している。

最近の話題になっているデジタルツインと相違するのは、現実の機械や都市をコンピュータ内部に構築するのではなく、実在しない空間を構築して、人間が内部で活動できる仕掛けになっていることである。これが現代社会にどのような影響をもたらすかは頻繁に議論されているので、人類の歴史の視点から意味を検討したい。

人類の最初の祖先を七〇〇万年前に登場した猿人とすれば、それ以後、一八〇万年前に原人、四〇万年前に旧人、二〇万年前に直系の祖先の新人が登場してきたが、その大半は狩猟と採集で生活し、人類の歴史の最後の〇・一％の時間でしかない一万年前に農業と牧畜を手中にした。この移行には重要な二点の変化がある。

第一は狩猟や採集の場所であった森林や草原を農地に転換したことである。一万年前の地球には六二億ヘクタールの森林があったが、現在は四〇億ヘクタールしか残存しない。減少した大半は農地に転換された面積である。第二は集団の規模が狩猟社会の数十人程から何桁も増加し、しかも定住により狩猟採集の空間を消滅させてきたことになる。

二〇〇年前に工業が人間の主要な産業になってからは農地や牧場が工業用地に転換され、その周囲で人間が生活する都市という名前の高密度な空間が発生し、集団の規模も数十万人から数千万人まで拡大してきた。その結果、現在では人口の半分以上が都市に生活し、趨勢が変化しなければ今世紀中に人類の七〇％が都市人口になる。

この工業社会に投入されたのがインターネットで、電話のように特定の相手との通信ではなく、面識のない未知の相手と情報交換が可能な情報社会が実現した。「フォートナイト」という対戦ゲームには世界全体で三億人以上が登録し、同時に一〇〇〇万人以上が対戦する場合さえ実現しているが、大半は相互に未知の人々である。

このような背景から登場したのが「メタバース」であるが、これが成功すれば、発想したM・ザッカーバーグの言葉のように一〇年後には一〇億人が参加する集団になる。現在の社会ではジャカルタが三五〇〇万人、マニラが二五〇〇万人、ニューヨークが二一〇〇万人という人口規模であるが、それらと桁違いの集団が出現する。

この視点で人類の歴史を回顧すると、いつも新規に登場する社会は集団の規模を桁違いに拡大しながら、農業が森林を、工業が農地を、情報が都市を破壊してきたように、それ以前の生存基盤を破壊して発展してきた。地球規模にまで規模を拡大した「メタバース」が人類の将来にもたらす影響を考察することはビジネスの範囲を超越した重要な課題である。